
black snow

畔

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

black snow

【Nコード】

N2816Z

【作者名】

畔

【あらすじ】

何度目かの高度経済成長期が過ぎ、地球は再び汚染された。

12月。大気に舞う塵によって黒い雪が降る。酸性雨、磁気異常、終末の世界。

劣悪な環境の中、世界が滅びると言われている中で一掃屋クリーニンクのナイン・ペンジャスは淡々と業務をこなす。

そんなある日、彼の運命を変える依頼が舞い込んでくる――。

t h e o p e n i n g

雪が黒い。

窓から覗く景色は雨が降る予兆とでもいつかのよう白んでいた。ナインはそこに黒い斑点を見つける。声を出す間もなく、白のキャンパスに墨汁を落としたような黒い斑点が急速に増えた。斑点は宙を漂い、やがて地面へと消える。

黒い雪。

緑を取り戻したと思われた地球は何度目かの高度経済成長期を迎え、再び汚染された。

光の届かない街、便利を求めすぎた代償。

黒い雪はそれを顕著に示している。

ブルルルルル。ブルルルルル。

味気のない音が空気を震わせる。ナインは受話器を取った。

「もしもし。……はい、そうですが。——ご用件は？」

壁掛け時計に目をやる。アナログ式の、幾分か時間がズレている時計。便利さの代わりに与えられた談笑の一つ、磁気異常。

「……申し訳ありませんが、当店はそのようなことを取り扱っておりません」

住宅街からやや離れた場所に建っている、こじんまりとした店。看板すらかかっていないが、それでも都市部から客は来る。

客の言葉を聞いたナインは形の良い眉を顰めた。舌打ちをしたい

気分だ。

「……分かりました。明日の三時ですね」

ナインは表に出る。そこでは一頭の飛竜が寝そべっていた。彼が近付くと、飛竜は眠たげに瞼を開けナインを見やった。

「今日は少し遠くまで飛ぶぞ、ドラ」

愛竜の頭を撫でてやり、その背中に飛び乗る。飛竜——ドラ——は翼を広げ、ゆっくり上昇した。

「ねえジオ、『一掃屋』^{いっそうや}なんて本当にいるの？」

ベラ・キャロルは厳つい面立ちをした男に尋ねた。父親譲りの褐色の肌に映える深紅の瞳が不安げに揺れる。

一掃屋は簡単に言うのなら、何でも屋のことだ。田舎のことなど気にもかけていない政府の軍に代わってならず者を一掃してくれるから、そのような名がついたのだと言われている。主な依頼が、はびこる悪を成敗してほしいというものであるというのも由来の一つだが。

彼女の父親——ジオ・キャロル——は、途中で通話を切られた携帯のディスプレイに視線を落とした。待ち合わせの場所に到着したら電話を入れると言われてからもう三十分が経過していた。

その時だ。上空から帽子を目深に被った青年がやってきた。

「お待たせしました。荷物を預かりに来ました」

ベラは彼が意外にも細身だったこと——ベラは自分の父親のように武骨な男が『一掃屋』をしているかと思ったのだ——、若

かったことに驚いた。自分とあまり歳が変わらないように見える。

青年——ナイン——は言葉を続けた。

「尚、お預かりした荷物が破損しようと紛失しようと当店は一切責任を負いませんのでご了承ください」

それにはジオが反応する。

「そんなの聞いてねえぞ!!」

するとナインは鋭い眼光をジオに向けた。

「俺の仕事は預かった物を綺麗にすることだ。業務外のことに責任は持てないね」

「チツ……!　しょうがねえな。御雨以上に腕の立つ一般人はいねえんだ」

「『荷物』は?」

「あの家の中だ」

ジオは北西に位置する色あせた小屋を指した。ナインは頷き、「数は?」

「十五だ」

「なるほど。それじゃあ料金の話だが——」

ナインは金額を伝えた。ジオの顔色が急速に蒼くなっていくのが分かった。話を飲み込んだ頃には、鬼のように憤怒していた。

「バカヤロウ!　そんなに払えるか!!」

「なら、交渉決裂だな」

ナインは肩を竦めた。飛竜に乗ろうとしたその時、携帯が鳴る。

ナインはジオに背を向け、通話ボタンを押した。

「大変長らくお待たせしました、『ペンジャス・クリーニング屋』です。……本日ですか?　それなら——」

「待て!　ちゃんと金を払う、だから俺の依頼を聞いてくれ!!」
慌てて押しとどめるジオをナインは一瞥した。

「——それなら、五時以降ということになりますが。……毎度ありがとうございます。では、五時に。○ビルですね。承知しました」

ピツと通話が切れる音が静寂の中に響く。

「それで、俺はどうすればいい？」

「『荷物』を綺麗さっぱり片づけてくれ。ただし、清掃しすぎるなよ？」

「それには別料金が加算されるが」

「構わない。背に腹は代えられないからな」

「分かった」

ナインは一度飛竜のところへ戻ると、銀に鈍く輝く銃一丁と何本もの剣を取りだした。短剣、長剣、長さは様々である。

「スゲエ数だな」ジオは感嘆する。

「趣味で集めているだけだ」

「さすが一掃屋ってところか」

それを聞いたナインは露骨に嫌そうな顔をしたが、ジオはそれに気付いていなかった。

「あんた、この界限じゃ『一掃屋』の名で結構有名なんだぜ」

『荷物』を一掃しようと室内に繋がる唯一のドアを開けるために取っ手に伸ばされた手が止まる。

ナインは冷めた目でジオを見据えた。

「俺の仕事は物を綺麗にすることだ。一掃屋なんかじゃない」

クリーニング

t h i e f

黄ばんだ空気が漂う中。

男は琥珀色をした液体が入ったグラスを手にする。すでにぬるくなつてしまったそれは、余計に喉を乾かせた。男は手元の麻雀牌を睨む。どれほど眺めても牌が変わることはないのだが、それでも勝負に勝ちたいという執念が男の潔さを削いでいる。

男は目の前の若者に目をやった。金髪青眼の、眼光の鋭い若者。恐らく歳は男の半分もないだろう。

若者は男の視線に気づき、早くしろと勝負の続きを促した。全くブレのない表情、きつと勝負はついている。だが、そんな若造に自分が負けそうになっているなど、彼は信じたくなかった。

「なあ……もう止めにしないか？」

若者は呆れたように言った。

「いや……まだだ！　まだいける！」

「そうだそうだ！！」

同じく麻雀に参加していた、どこまでも残念な面々は男に加勢する。

ナインは苛立ちを隠そうともせず、短く舌打ちした。

「分かった。それならさっきの賭けをナシにしてやる。あんたはただ、そのコートに忍ばせているものを素直に渡せばいいんだ」

男はぎくりとしてポケットの中にあるものに触れる。——どうして見破られた？

「あんた、それでバレてないとも思ってたのか？　誰が見ても拳動不審だったぞ」

「クソっ……！　こうなりや強行突破だ！！　行くぜ、野郎共！　」

「うおおおおー！！」

拳銃や刀を片手に向かって来る連中を、ナインは最小限の動きで

かわしていく。

適当に選んだ武器に手を伸ばしてみると、それは小型ナイフだった。まずまずの得物だ。

ナインはざっと周囲を見渡した。ジオの言った通り、『荷物』の数はきつちり十五だ。

十五人。彼らが依頼品を盗んだ犯人たち。

「只今をもちまして、依頼品の回収を行います。身の安全は保証しかねますので、せいぜい気をつけることだな」

その言葉と共に、ナインは男のコートを切り裂いた。

中から出てきたのは、光が入る角度によって色が変わる、直径五センチほどの宝石だ。魔石と呼ばれるそれは、古代の魔導師たちが自然エネルギーを凝縮し封印を施した石である。魔石が一つあるだけで街一つ分の自然が戻ると噂されている。だが、魔石は世界にほんの少ししかなく、そのほとんどを政府が管理しているのだ。そして政府は魔石を使って新兵器を作ろうと企んでいるらしい。

「噂には聞いていたが、初めて見たな」

ナインは魔石を手にとった。

貴重な品をなぜジオが持っていたのかは知らないが、ナインは知ろうとも思わなかった。

俺の仕事は他人を詮索することじゃない。

男は魔石を奪い返そうとしたが、ナインが長剣を手にし、切っ先を自分に向けてきたので抵抗を止めた。

「依頼品の回収を完了致しました」

冷やかな声と共に、ナインは小屋を後にした――。

「取り返してやったぞ」

無造作に放り投げられた魔石をジオは慌ててキャッチする。

「危ねえな、オイ！」

「依頼された仕事は終わらせた。あとは知ったこっちゃない」

「チツ、無愛想な奴だぜ」

「それより、報酬はちゃんと払ってくれるんだろうな？」

「ああ。——ほら、持っていけ」

ジオは平べったくて長い鉄の塊をナインに寄越した。よく見ると、それは手入れのされていない剣だった。

「数少ない対磁気性の剣だ。世界の巨匠が作った幻の一品だぜ。俺がそいつから貰ったんだ、大切にしろよ」

ジオは自慢するかのように言う。ナインは訝しげに眉を顰めた。

「これじゃ使い物にならないんじゃないか？」

すると、ジオは勝ち誇ったように言った。「この剣はな、切れ味なんかどうでもいいんだ。これは獲物を叩き潰すための剣なのさ」

「……あんた、いったい何者なんだ？」

「俺はただの一般市民だぜ」

「魔石といい、この剣といい……。とてもじゃないが、ただ者には見えないな」

「他人には干渉しないんじゃないのか？」

「疑問に思ったただけだ。たとえあんたがお偉い様だったとしても、俺には関係ないが。——それでは、またのご利用お待ちしております」

ナインは柱に繋いでいた縄を外した。自由に身動きが取れるようになった飛竜は気持ち良さそうに翼を伸ばす。

「待つて！……頼みたいことがあるの」

帰ろうとしたナインを引き留めたのは、ジオの娘のベラだった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2816z/>

black snow

2011年12月20日14時49分発行